

【小説部門・優秀賞】

霽れ傘

兵庫県立宝塚西高等学校 第3学年 坂上 心純

停留所で、図書館前を経由するバスが来るのを待っていたんです。

日焼けして黒ジミだらけの時刻表には、次発の便が四分後で来ることが書かれています。辺りに行人人なんて見当たりませんし、そのうち車通りだってなくなってしまいました。牛蛙の野太い鳴き声が四方八方からそれだけ浮き上がって聞こえていて、それが嫌に印象的だったのをよく覚えています。

ちょうどその頃、僕は膝の靭帯を痛めていました。起きがけに家の階段から足を踏み外して数段下まで滑り落ちたんです。膝へ変な風に力を入れてしまったらしく、二週間ほど松葉杖に身を寄せて生活することとなりました。不謹慎でしょうが、昔から運動はからきしで大した怪我もしてこなかったものですから、松葉杖をついて歩くなどという身に馴染みのない経験に少しワクワクするくらいの心持ちでした。四つも年が下の弟と母には怪我の経緯といい当人の緊張感の無さといい、随分と呆れられたものです。

雨は億効でした。杖がマンホールの上とかでよく滑りますし、水のたっぷり染み込んだ靴下なんかスニーカーの中でギチギチ鳴っていて不快です。杖で片手が塞がってしまっているものだから、僕はコンクリのヒビに溜まった雨水が細くなって流れていくのを何時までもぼうっと眺めている羽目になりました。

そうするとふと、何とは無しに、時間の進み具合が気になってきます。別に特段先を急いでいた訳でもありませんけれど、ただ少し、四分間というのはこんなに長つたらしい時間だったろうかと思ひ至っただけです。停留所へ来たのが何分のことだったのかを忘れてしまったので、僕は僕の中身にある体内時計の進み具合に気を配るほかありませんでした。

待てども待てどもバスはやって来ませんし雨は止みません。もう一度腕の時計艦に目を凝らしてみると、そこで漸く瞳の中に深い霞がかかったみたく秒針の位置へ上手く焦点が合わないことに気付きました。ザアザア雨が降っていました。それだけでした。停留所のトタン屋根の下だけ、時間のひずみにあるみたいでした。

「どうして傘を差さないの」

僕に声をかけたのは、年端もいかない小さなお嬢さんでした。雨の届かない屋根の下で、何故だかその子は真っ赤な手傘を開いているんです。子供の体には少々嵩張るくらいの立派な傘でした。分厚い傘地に遮られてしまっていて、お顔はよく見えません。頭四つ分ほど高くにあるこちらへ一所懸命首をもたげていることと、ピカピカしたマジックテープの運動靴をキッチリ留めて履いていることだけが分かりました。ガラス細工みたいな声でしたから、僕は何かを尋ねられたということにも、気付くのがスッカリ遅くなってしまいました。

「傘、持っていないの」

「いや。持っているよ」

「そうしたら、差さなくちゃ。濡れちゃうわ」

「ここには屋根があるから、濡れたりしないよ」

「そんなことないわ。お兄さん、びしょびしょだもの」

僕は首を捻りました。突然だったものですから少し降られてしまいましたけれど、肩がほんの少し濡れた程度のことです。びしょびしょだなんて、そんな大層なことにはなっていません。

「今日は雨が降っているのよ。おかしいわ、お兄さん」

その子は随分慌てているようでした。何だか可哀想に思えて、バスが来るまでの間だけ僕は一緒に屋根の中で傘を差しておいてやることにしたんです。けれども持っていたビニル傘を開こうとしたときに、僕はちょうど側溝の金網に杖の先を引っ掛けて、危うく転びかけてしまいました。

「怪我しているの」

「いや、ウン。平気だよ」

僕が決まりの悪さをどうにか取り繕おうとしていると、その子は停留所の隅の欠けたプラスチックベンチの上に小さな足を引っ掛けて、頭の高さを僕と同じくらいに合わせてから、僕の頭の上へ自分の赤い傘をちょこんと被せてくれました。「入れてあげる。私の傘、立派なのよ」

ふと傘の骨組みを見上げて、大層驚きました。お嬢さんの傘の中は、不思議なことに『晴れて』いたんです。目の奥まで焼け付くような深い群青の色が、途切れないで何処までもずっと傘の内側を流れていました。季節はきっと夏です。カンカン照りの如だる陽気に分厚い入道雲が立ち上っていて、アブラゼミが鳴いているんです。夏日に蒸された濃い草の香りがしました。雨でしとどに濡れたコンクリートの表面が、照りつける透明な日差しの筋にピカピカと鉱石みたく光っています。

「きれいでしょう。私のよ。私の晴れなの」

お嬢さんは梅雨なんてとうの昔に明かしてしまっ、スッカリ夏にいたんです。間抜けに口をポカンと閉いて暫くのあいだ僕は呆気に取られていましたけれど、その時になってようやく、その子のお顔が見えました。

夏の青を目一杯に写すはずの大きな瞳は、夜の海の底みたいでした。酷く静かで凪いでいて、温度の灯らないほの暗い目。ジオラマの夏なんて、あの子はこれっぽっちも見ていません。あの子はきっと、何も見てはいませんでした。

『このバスは、橋宮駅・希望ヶ丘経由 棚坂営業所前行きで御座います』

停留所にバスが停まりました。プシュウと分厚い音を立てて、左に扉が開きます。中からはキッカリ冷えた空気の塊が降りてくるだけでした。隣にお嬢さんの姿はありません。僕の肌にはまだ、夏日の刺すような熱が残ったままでした。

それから少しして、弟が学校に通わなくなりました。母は何も言わないで、一日三回決ま

った時間に弟の部屋へ食事を運んでやる以外には、あの子の好きにさせてやっているようでした。僕が部屋で端末をいじっていると、時たま隣からドアが開いてキイと小さく軋む音が聞こえてきます。弟が便所へ行くために部屋から出てきているんでしょうが、聞こえてくる控えめな足音だって、何だか怯えて縮こまっているみたいに思えました。

その日は手が離せないので食事を部屋に持って行ってやるようにと母から言付けられて、随分久しぶりにあの子へ、ドア越しですけれど、声をかけたんです。

「裕太。晩メシ」

なるだけ自然な風にと努めたんですが、かえってぎこちなくなってしまったかもしれません。肉親相手におかしなことですけれども、心臓の音が頭に響くぐらいには緊張だっりました。返事はありません。僕はドアノブに手をかけました。

「入るよ」

ドアの間隙から声をかけると、小さな咳払いとくぐもった身動ぎの音が聞こえてきます。弟はベッドの木の枠にグタッと寄りかかって小さい頃に買ってもらった恐竜のキーホルダーを手に握りしめていました。廊下から差し込む照明の光が眩しいのか、目をキュウと細めたのが分かりました。

「腹、減ってない」

「昼も食べてないだろ。お前」

スイとこちらを覗くと、すぐにまた三角座りで小さく縮こまってしまいます。僕はこぶし大のしゃけおにぎり二つと豚汁のよそってあるお椀がのった御盆を、勉強机の上に散乱した教科書やらプリントやらを肘で押し退けてからそこへ置いておきました。

「なんか他に、持ってきてほしいのある？」

「……………」

「母さんが、足りなかったらおかわりあるって」

多分必要ありませんでしたけれど、それだけ言って僕は部屋を出ようと思いました。

「兄ちゃん」

その時、あの子の方から僕を呼び止めたんです。カーテンを閉め切って照明も消してある部屋の中ですから、余計に肌の血色が悪く見えました。その、青白い唇を、ほんの少しだけ動かして、

「寒い」

ぼつんと言っただけ、弟はそう言いました。その日は酷く梅雨冷えする夜でしたから、きっとあの子は毛布か何か、寒さを凌げるものが欲しかったんでしょう。けれど僕にはその様子がどうも、弟の頭の上に大きな黒い傘が負ぶさっているみたいに見えたんです。それが傘地の裏側から延々とあの子の肩に雨を降らせて、凍えさせているんです。毛先からしとしと黒い雫を垂らしているのでさえ、そのときの僕にはハッキリ見えました。

「ブランケット持ってくる」

情けないことですが、僕は顔を背けるように部屋を出ました。それ以上その様子を見

ているのが辛かったんです。無理矢理取っ払ってしまおうかとも思いました。けれども駄目です。傘はあの子を庇うもので、身を守るためのシェルターでした。無理に取り上げてしまっただけで、ただでさえ脆い弟の芯はいとも容易くポッキリと折れてしまうことでしょう。じれったくて、悔しくてたまりませんでした。重く垂れ込める雨音に首を折って項垂れていたあの子は、たとえ雨の降り続く傘の下であろうが安全で変わらない場所にいることを選んだんです。友達よりも、母よりも、大好きだったサッカーよりも。僕は僕の怪我に何かと世話を焼いていた弟の呆れ顔が、本当は自分の方こそ助けてほしいとしきりに訴えていたのではあるまいかと今だってどうしても考えてしまいますし、その度に対処のしようもなくやるせなくなります。こればかりはどうしようもない、後遺症なんです。

「だから僕は君にやる気がないだとか、そういうことは思いません。そもそも、気合いの話じゃありませんから」

「……話長いよ」

赤錆びたバス停の標識板と、トタン板の屋根が見えてくる。校舎からバス停までの二十分間をめいっぱい使い切った先生は、大きな黒い傘の骨組みを見上げて眩しそうに笑った。

「俺、今年で十四なんだけど」

「そうですね」

「そんな嘘みたいな話、サクサク信じないから」

路傍に走る農業用水路の苔むした側面に、小さな雨蛙がくっついている。細雨が水田の表面を細かく叩いて小さな水紋を広げていた。山の向こうで灰色の雲が途切れている。きっともうすぐ雨があがるのだろう。

前の学校での生活をドロップアウトして、こんな辺鄙な場所まで引っ越してきたのがもう二ヶ月も前のことになる。辺鄙な場所にある学校は勤めている先生まで辺鄙なようで、己の担任教師に当たるこの人に関しては殊更それが顕著だった。大抵いつもこんな具合に何処となくぼんやりとした奇妙な物言いをするのに、人畜無害そうにソツと笑っているのがこれまた常なのである。その対比はいささか不気味にも感じられる。

「本当かどうかはいいんですよ。大事なのは僕がそれを知っておくことだ」

「……」

「君が時々人と話すのが怖くなってしまふのは、君の傘のせいです。誰にだって大なり小なりかぶさっているものなんですよ」

「……どうすればいいの」

「どうもしなくて結構です。僕や周りの人間や、いつかの君がどうにかしてくれます」

先生はそれ以上、自分の弟のことは話さなかった。結局『傘』はどうしたのか。黒い雨は止んだのか。

これっぽっちも話そうとはしなかったし、俺もわざわざ尋ねることはしなかった。

「それに、決してことごとく悪いものって訳でもないんですよ、あれは。一人で膝を抱えて自分の心臓の音に耳を澄ましていたい時間だって、きっとあるでしょう」

バス停の標識板の高さにちょうど頭の位置を並べた先生は、傘をすぼめ、表面に留まったままの水滴を軽く振るって払う。

「でもね。星も、月も、雪も、霰も、雷も、雨も、ずっとどれかひとつしか眺めていられないのはやっぱり、勿体無いと思いませんか。お嬢さんは晴れが一等お気に入りのようでしたけれど、それならきっと秋晴れの鱗雲も、凍晴れの透明な空色も、見ておいた方がいくらか良かった」

遠くから、大きなエンジンの振動音と砂利の擦れる音が少しずつ近づいてくる。やがて一対のヘッドランプが雑木林の中を蛇行しながら進んでくるのが見えた。

「……先生は、怖くないの」

傘がどうこうという話は、正直よく分からない。けれどその代わりに、皮膚と空気とが触れている部分を少しでも小さくするために部屋の隅でギュウと手足を縮めて息を殺している人間の気持ちや、微かな物音ひとつにも肩を震わせて怯えながら生きている人間の気持ちを、俺は既に知っている。怖いことだ。『変化』は怖いのだ。ここからここまでと、最初から範囲の決められてある箱の中で生きられたなら、どんなに楽だろうかと思う。

バスが停留所に止まる。間の抜けた音を立てて、ドアが開いた。

先生は何も言わない。何も言わないまま、閉じたばかりの傘をまた頭の上に差した。

「…さようなら」

「はい、さようなら」

扉が閉まり、発車のアナウンスが車内に流れる。バスが走り出して暫く経ってから一本道を振り返っても、黒い傘は標識板の側で佇んでいるままだった。やがて黒雲は途切れ、いつの間にか雨が止んでいた。